

北京市重点中学校校長の
「4 + 2」教育学修士養成方式に対する意見と提案
(訪問報告)

北京師範大学「4 + 2」教育学修士養成方案系列研究報告

北京師範大学教育学院
2002年4月～10月

2002年から、北京師範大学は「4+2」教育学修士養成方案（草案）を新しい試みとして始めた。この養成方式は、国内ではまだ試験段階であり、また先行研究をしている研究者はいないので、その実施可能性を論証する必要がある。まず、「4+2」教育学修士養成の潜在対象である）学部生を対象として、「4+2」教育学修士課程に在学する意向及びこの養成方式に対する意見と提案について調査した（研究報告（一））。もう一方、北京市五つの中学校の校長を訪問し、「4+2」教育学修士の募集部としての）北京市の一流の中学校在この新しい方式に対して、どの程度受け入れられるかを調査した。そして、「4+2」教育学修士養成方式の草案（北京師範大学が初歩的に定める）について意見を求め、この方案をさらに改善させることを期待している。

- 訪問時間：2002年5月下旬から6月上旬にかけて
 - 訪問対象：北京師範大学附属実験中学校の前任校長先生、北京第101中学校の校長先生、匯文中学校の校長先生、北京大学附属中学校の校長先生と北京第二中学校の校長先生。
- 訪問形式：半構造訪問

一、「4+2」教育学修士養成方式をどの程度受け入れるか

1、 各校現在の教師の学歴構成、出身大学

➤ 学歴構成

- 1) 北京師範大学附属実験中学校：学校教員は基本的に本科（学部）以上の学歴を持っている。修士課程の現職教員あるいは修士課程を修了した教員は50人で、また、30あまりの人が修士課程に入ったことがある。
- 2) 北京第101中学校：学校教員が本科を主として、その中で、修士の学位を持つ教員は6、7人いたが、今4人になった。
- 3) 匯文中学校：学校教員は百パーセントが本科以上の学歴を持っている。その中で修士の学位を持つ教員は10%ぐらいで、修士課程クラスで研修したことがある教員は約40%である。
- 4) 北京大学附属中学校：学校教員の中で1/3が修士で、数少ないのが博士で、ほかの教員は全員本科である。
- 5) 北京第二中学校：学校教員の中で修士の学位を持つ教員は8%で、修士課程クラスで研修したことがある教師は殆ど100%に達している。

以上から見れば、これらの一流中学校における教員の学歴は本科及び本科以上に達している。修士の学位を持つ教員はまだ少ないが、修士課程クラスで研修したことがある教員の比率が大きく占めている。

➤ 出身大学

これらの中学校の教員は主に北京大学、中国人民大学などの一流の総合大学、北京師範大学、東北師範大学などのような高いレベルの師範大学を卒業している。

2、「4+2」教育学修士養成方式に対して、どのぐらい受け入れるか

➤ 現在、学校の中でも総合的な能力を持つ教師はまだ少ないので、「4+2」教育学修士が将来きっと要望があるだろう。

中学校の仕事は極めて細かい仕事なので、「十本の指で琴を弾く」ほど高い能力を持つべきである。けれども、多くの新卒教員が入った時は仕事に適応しにくく、「一本の指で琴を弾く」ことしかできないので、結局混乱をきたす。したがって、もしこの方式が予期した目的通りに達成すれば、専門知識だけでなく、教育学、心理学などの知識も持つほか、管理能力や適応能力にも優れた総合的な資質を持つよい教師が多く誕生し、各学校はこのような教師が大歓迎されるはずだと北京第 101 中学校の校長先生は言った。

➤ 中学校は教員を募集する時、能力を一番重視し学歴は二の次である。ちなみに、選考に当たって、応募者がどんな養成方式を受けたかはあまり重要ではない。

- ・ 能力に優れた人を採用する。単純に学歴だけで採用するのではない。もし「4+2」教育学修士が多数を占めれば、彼らは教育、トレーニングを受けたからこそ、よりよい職業的素養を持つかもしれないと校長たちは言った。
- ・ 教育学修士養成方式で、「4+2」と「4+X+2」（学部 4 年を卒業した後はしばらく仕事に就き、その後、2年間の教育学修士課程を修了すること）とを比較させると、校長たちは「4+X+2」教育学修士養成方式を重視している。また、このような教師の養成が早いし、教員の仕事に適応するのも早く、それに、ある程度実践的な教授経験を持っていると多くの校長たちが思っている。
- ・ 「4+3」（専門修士）と「4+2」の養成方式の比較において、ある校長は「4+2」方式を重視することを明言した。それは、彼らが受けた訓練は、中学校の教師の資質にアプローチし、中学校教師の持つ専門職性に適応しやすいし、また教育学、心理学、社会学の知識を持っているので、視野もより広いからである。

➤ 現在最も必要とする教師は科目や学校によって違う。

北京師範大学附属実験中学校の前校長先生は、必要とする教師は主に基礎的な学科に集中していると述べた。例としては、国語、数学、英語と情報技術をあげている。北京第101中学校の校長先生は国語、数学、外国語の教師が必要だと述べている。匯文中学校の校長先生は英語が上手だけでなく、第二外国語のできる教師が不足していると述べている。北京大学附属中学校の校長先生は理科（物理、化学、生物）の教師、北京第二中学校の校長先生は物理、数学が必要だと述べている。

➤ 「4+2」教育学修士を募集する比率は、現在のところ各学校に明確な基準はない。

北京第101中学校の校長先生はどのぐらい募集するのではなく、教員として適格な者を大歓迎すると述べた。それと同時に、彼女は最近の採用において、教師陣の安定のために、毎年募集する修士課程修了者の人数は大体募集する全体の三分の一を占めると述べた。匯文中学校の校長先生は、現在新しい方式の修士課程修了者はまだいないので、この方式の学生は教師としての資質を見極めにくく、それ以上に、どのぐらい募集するかどうかについてと聞くと、どれぐらい採用するかの予想はできないと述べていた。

二、「4+2」教育学修士養成方式に対する評価と提案

1、「4+2」教育学修士養成方式に対する評価

➤ 「4+2」という養成方式が必要とするか

訪問した校長たちは「4+2」という養成方式の必要性を認めていた。その理由は次のように述べている。

1) 「4+2」養成方式は、師範大学における教師の専門職化の動向及び教師の学歴レベルと資質需要を高めることへの積極的反応である。

教師の専門職化と教師教育の発展に従い、このような人材養成方式は教師の学歴レベルと資質を高める需要と一致する。わが国のことを言えば、資質教育を立派にするために大学教員のレベルと資質を高めなければならない。「資質教育を立派にする鍵は教師である」。資質教育は教員に対して新しい要請を求めている。それは特に学生の実践能力の養成を重視することであり、学生に一定の実践能力を要請するには、教員はまずこのような能力を有する必要があることによる。それと同時に、これも教員養成に対して新しい養成を求めている。師範大学は教職課程を履修する学生に、学科能力と実践能力の両面を重視した調整を行い、すばらしい人材を育てようとするものである。

- 2) 「4+2」養成方式は、「科学教育による国の振興」という中国の重点政策において、中学校教員から最も高い科学研究能力の育成につながる。

国は「科学教育による国の振興」という重点政策を制定し、教育領域において、必ず教育科学研究を行う必要があるという「科学研究による学校の振興」を打ち出した。つまり、教師は一定の科学研究能力を備え、学校で教育実践にそって科学研究活動を展開するものである。このことは、今の教師教育に新しい要求を求めていることになる。「4+2」養成方式はこの要求に適合し、また養成された教師は能力構造、職業意識においてより強く見られる。彼たちは、高いレベルの専門的素養を備えるだけでなく、一定程度の教育研究を展開する能力を備える。「4+2」養成方式は教育全体の発展への要求、現代の中学校への教師に対する要求に相応しく、とてもよい構想と実践である。

- 3) 「4+2」養成方式は国際社会に近づこうとする一つの教師養成の方式である。

諸外国において、例えば、アメリカではこれと似ている養成する方式は早くから創設され、多くの高学歴かつ高いレベルの教員を養成している。

- 4) 全体から見ると修士の総合的素養と能力は本科生（学部生）より高い。

現在の状況からみれば、修士は本科生と比べて、知識面、総合素養、教育研究能力、学術論文の作成能力などの面においても、確かに明らかな相違点があることがわかる。当然学歴がすべてのことを決定するのではなく、修士の中でも学部生より能力が低い者もいる。いずれにせよ中学校の校長たちは、院生（修士・博士）を教職に就かせることを歓迎する人が多い。

- 5) 「4+2」養成方式のカリキュラムの設置により、中学校教師に対する学歴・専門的知識以外の要請がなされてきた。

校長たちは、たとえ現在多くの教師が修士の学位を持つ教師でも、心理学や教育学、教育行政分野の知識が足らず、教育に対する芸術性や生徒との交流が不足していることに言及した。つまり生徒を教えることと研究をすることは違うことであり、中学校の教師にとっては、高い学歴を強調されることはないが、しかし学科に関する知識だけを有しているからよい先生になるわけにはいかない。こうした新しい養成方式のカリキュラムの設置は、これらの総合素養を高めようとする考えを表している。例えば、心理学・教育学を取り入れたカリキュラムは、更なる波及効果を生み出すだろう。

- 6) 「4+2」という養成方式は新任教師の役割の転換と適応に最もよいものである。

以前、新任教師の役割転換とたくさんの仕事への適応に関する多くの任務は全て中学校側が担い、よく「師匠制」という方法を取って新任教師を指導する。従って、現在このような系統的な養成方式があってもよく、実践能力を重視すること、長い時間をかけ

て教育現場で実習することはよいやり方である。

➤ 「4+2」養成方式は本当に実効性があるのか

この問題にあたり、校長たちは楽観的かつ慎重的な態度をとり、断言することはしていない。修士課程に入った学生は頭がよく、学習が得意だと北京第 101 中学校の校長は述べた。新しい養成形式の卒業生がまだ出ていないので、このような学生は教師としての資質がどうであるかは断言できない。しかし理論的に言えば、彼らは教育学、心理学の訓練を受けているので、視野が他の教師より広いし、“使いやすい”人材であると匯文中学校の校長は言った。実効性があるかどうか、それは大きな問題である。もし相変わらず、経験派に属する専門理論や専門知識、教育実践が全く通用しなければ、学校現場では役に立たないと北京大学附属中学校の校長は述べた。「4+2」養成方式に実効性があるかどうかは、学校の管理体制や学生の学習と態度に繋がる。しかし一般的に言えば、実効性があると認めるべきである。なぜなら、専門知識に基づいて、教育の専門知識を学習したからである。また、「4+2」を選んだ学生は目標が明確で、役に立つと北京第二中学校の校長は述べていた。

➤ 「4+2」養成方式に対してどんなところが不安なのか。

1) 学校経営面では、各校の状況が違う。

北京師範大学附属実験中学の前任校長は、転職が効率的な人材移動なので、あまり心配することはないが、もし学校側が優秀な教師を残させなければ、これは学校側の問題だと述べていた。北京第 101 中学校長も、学校経営面への心配があり、現在の状況からみると、大学院の修了者が一定の教職に落ち着かず、すでに転職してしまう人も少なくないと言及する。特に、北京師範大学の多くの卒業生は中学校を、戸籍を解決するためのスプリングボードとして取り扱うので、新しい養成方式の学生に対して、このような問題が存在するかもしれないので学生を管理しにくいと述べた。北大附属中学校長は、転職に対して心配することがないが、「彼たちは 6 年間の時間をかけて、勝手に捨てるわけはない」と述べた。経営における他の面でも、「特に心配することはない。なぜならば、現在中学校の教師たちの学歴を高める一方、修士課程修了者がますます多くなるので、新しい養成方式の学生もあまり特別なメリットがない」と述べた。匯文中学校長も経営の難しさに対してもあまり心配していない。彼は「市場経済・多元文化の社会の中で、転職を許すことも個人の選択を尊重する一種の趨勢であり、もちろん、これは学校の全体的な仕事や、学校環境に関連すべきである。匯文中学校に限れば、教師に対する基本要件は契約年限をきちんと終わらせることである。そして教師一人一人が一日の仕事をこなし、一日の責任を取り、より質の高い授業を行う志をもつべきである。優秀な人材

に対して、もちろん勤続するよう望むが、その代わり不適格者にとっては、学校側も主体的に人員整理できるようにすべきだ。」と述べた。北京第二中学校長は経営面で転職を除き、その他の心配することはないと考えていた。

2) 俸給・コスト面では、あまり心配な点はない。

校長たちは公立学校にとっては、国の学部生・大学院生（修士・博士）への俸給標準は学歴に応じた規定があり、採用するコストは高いわけではない。学歴は職務のランク付けと関わるものでしかない。俸給は主に能力と関連し、コスト面での心配はないと思われる。

3) 他の留意事項

第一に、教員養成が6年間かかり、養成にかかる時間が長すぎる上に、目的が明白でない学生が少なくなく、無為に日々を送り、肝心な教育技術を習得できないかもしれないこと。第二に物理科の教員を例にすると、学部の専攻は理工学だが、修士段階では文科精神の養成について教授する時間がないのは仕方がないと言えよう。教育精神をみても、彼らの考え方も自然科学的なので、教育学の薫陶を受けなければ人文精神が育成されない。第三に学部段階で専門分野をよく学習した学生はみんな専攻についての研究を行い、残った学生は教育関係の仕事に従事することである。従って、人材の質の問題が保証できないと北京大学附属中学校の校長先生は遠慮無く述べた。

2、「4+2」教育学修士養成方式に対する提案

➤ 人材養成の目標及びそれに即したカリキュラム面の提案

- 1) **理論の基礎**：この方式で養成した将来の教員は、幅広い理論と知識、最前線の教育観念と将来性を持つべきである。しっかりした専門知識を身につけ、職業に対する強い責任感を持つ。情報化時代の学習方法を身につけ、時代の発展と要求に対する読み取る能力を持つべきである。したがって、教育課程において、教育の基本理念が欠けなく、現代感覚と将来性を持つべきである。先進な理念で教師を充実させ、諸外国との比較教育課程を設けられ、学生たちに国内外の最前線のことを紹介しよう。
- 2) **実践能力**：中学校における教員の仕事は研究的な仕事と違う。けれども、よりよい理論基礎を持っている一方、職業を尊重する精神、教授・組織・管理の能力、教授技術（持っている知識をどのようにして学生への教える知識に反映させるか、また道理・内容・言葉などをどう分かりやすくするかなど）の要求がもっと高いと言える。そのために、教育課程の編成において、実践を重視すべきである。例えば、実践と密接に関連

する教育学、心理学の教育課程を設ける。一般的で理論性が高い学問は教育学、心理学だけではない。現場の先生を招いて授業をさせてもいい。実際に、中学校の仕事の方がより細かい仕事なので、「十本の指で琴を弾く」という能力を持たなければならない。けれども、多くの新卒教員が来た時は仕事に適応しにくく、「一本の指でしか琴を弾けない」という状態なので、仕事をするときは混乱をきたす。また、実践を中心としても、決して教育知識と教育実践を学ぶことを簡単に適応することはできない。基本的な教育知識を学習した後で実践するのでもないし、単純な学科を中心とするのでもない。

- 3) **教育科学研究能力**：この方式で養成した教員はしっかりとした教育科学研究能力を持っているべきである。教授するという任務を負うと同時に、教育科学に関する研究活動を行い、実際の教育活動に促すべきである。彼らは教育実践の中で実用性のある研究を行うはずである。単純な理論研究ではなく、努力して教科の知識に精通した人になるはずである。「いかにして学校の現状を反映し、いかにして教育科学に関する研究を行い、いかにして成果を出すか」ということがよく分かる必要がある。教育課程において、ある校長先生は、現代教育の研究方法のような教育課程を編成し、彼らに教育科学の研究方法を身につけさせる。それと同時に、50%の時間を理論の学習に使い、50%の時間で実践しながら研究する。安定した基礎知識を強い実践能力が身につくことを望んでいる。
- 4) **学科知識、技能**：このような教師は教科教育のポイントを把握でき、教科教育における教師に対するニーズに応えられるはずである。「大学4年生では、大学で得た専門知識と教育実習との関連性に注意し、教員になりたい学生に教育の一般的な原理と教科教育の基礎知識を身に付けさせることが必要である。」
- 5) **知識面と視野**：中学校の教師にとって、充実した基礎理論を持つだけでなく、博識で、社会に対する視野が広く、多くの学問に精通した資質がますます重要になることである。学校の中でこのような資質を持つ教師は人気がある。各レベル、方面からの養成を通して、例えば選択科目において、できるだけ幅広く、多く設ける。新しい方式で養成される学生に最も前述した資質を持たせることが必要である。
- 6) **外国語の能力**：今、教育の情報化・グローバル化が発展するに従って、教師の外国語能力に対する要求が高まってきた。一流の中学校では、教科の教員が国際会議に参加し、諸外国と交流する機会がますます多くなる人もいる。もし相応の外国語能力を持たないと会議に参加できないし、さらに外国の先進的な教育方法と経験を学ぶことも難しいだろう。また、現在多くの学校では、ある教科で二ヶ国語を使って授業を行っているが、教師が高いレベルの英語能力を持つように要求されていることが背景にある。

- ・ このような方式の下で養成された教師の英語能力は、中学高級教師がもつ外国語レベルに準ずる能力に達するように設定されている。しかも、これらの教師は「公衆外国語」と「専門外国語」の面では標準に達することが最も望まれている。
 - ・ 外国語の実践的な応用力を高めてほしい。現在大勢の大学生が国家試験の英語 4、6 級証書を持っているが、リスニングと会話能力が低いので、大学院生を養成するときは、英語のリスニングと会話能力及び第二外国語に対して力を入れるべきである。このような学生たちが最も競争に強く、そして重点中学の教師に対する要求にも最も適応できるのである。
- 7) **情報技術を利用する能力**：現代教育技術が教育科学の中で発展するにつれ、教師はまた情報技術を把握すべきである。コンピュータの操作レベルと多様な方法で情報を収集する能力を高めるべきである。新しい方式の中でこの方面のカリキュラムに力を入れるべきだということを提案した。
- 8) **職業道徳**：特に彼たちの職業意識への責任感と道徳感覚を形成することを強調し、将来の職場で主体的に職業への自尊心と名誉を維持できるようにさせる。

➤ **実習についての提案：**

- 1) 4+2 養成方式での実習は「教育実習」と呼ぶかどうかをよく考えたほうがいい。
- 2) この実習は旧師範大学の本科 4 年生に行う実習とは異なる。前の教育実習における「何回か授業をし、何日か担任の先生になること」というほど簡単ではない。大学院生の教育実習には高いレベルが望まれる。この方式で教育を受ける学生は、実習期間中にわたって将来教員に就くにあたっての学校教育・科学研究のデザインを描き、単に学校教育レベルにとどまるのは望まれない。これらの学生は科学研究課題やそれに比べて小型の課程に対するカリキュラム開発に取り組み、積極的に参加できるはずである。例とすると、学校の教育課程において、実習生が自ら選択授業を開発し、自分で課程基準を作成し、学習内容を決定し、相応しい教科書を選択する。あるいは、本人で教科書を編集することを望んでいる。
- 3) 実習の時間割において、集中し過ぎることではなく、分散と集中のバランスがとれているほうがいい。

➤ **指導教員についての提案：**

4+2 養成方式で学生の実践能力の養成を強調するからには、課程の設置からだけではなく、指導教員の配分においても体現する必要があると北京師範大学附属中学校の前任校長先生が述べた。彼は「双指導教員制」、つまり、一人の理論レベルが高い指導教員と一人の特級教師が連携して学生を指導する方式のほうがいいと思っている。そして、師範大学は全国で有名な特級教師を招聘し、教員養成に参加することを提案した。

王 工 斌 方 穎 石 薇

翻訳者：閻 飛龍（補訳 三石初雄）